

茨城県海外子女教育
国際理解教育研究会
2000年度 広報誌

会 長 あ い さ つ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長 細野 泰也

平成10年7月に答申された教育課程審議会のまとめの中で、「国際化の進展に伴い、国際社会の中で、日本人としての自覚をもち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成することも極めて重要である。我が国や郷土の歴史や文化・伝統に対する理解を深め、これらを愛する心を育成するとともに、広い視野をもって異文化を理解し、国際協調の精神を培うことは、これからの学校教育において一層重視する必要がある。」と述べられており、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成することの重要性を大きく取り上げている。

これからは、「総合的な学習の時間」や特別活動の時間において、小学生が外国語に触れたり、外国の生活や文化に親しんだりする体験的な学習活動が実践されていくと考えられる。さらに、小学校でも英語の授業が取り入れられる。

2001年の今年は、IT時代と言われるが、いろいろの情報が日本にいながらにして世界へとアクセスできる時代でもある。特に、これからの「生きる力」を培っていくためには、国際理解や福祉、ボランティア教育等の内容が大きなウエイトを占められ、多様な「学び方」から、他人を思いやる心、たくましい体、さらに問題解決等が要求される時代の到来でもある。

先日来日したマレーシアのマハティール首相夫人が、「日本に対して、礼儀正しく前向きで勤勉である日本人の美德を忘れずに」とコメントをしている。何かこれからの日本人のあり方、生き方を見直す言葉であるように思われる。

私も昨年の秋に、オーストラリアのクイーンズランド補習校、シンガポール日本人学校のクレメンティ校を訪問する機会を得、本県から派遣されている先生方が全力投入をし、教育実践に精進されている姿を直接見ることができ、日本では考えられない厳しい環境の中で、ご苦労されている姿に感動させられた。

21世紀を迎えて、日本が世界のリーダーとしての役割を担うためには、いろいろな面から国際競争力をつけることが大きな課題である。そのためにも、児童・生徒に真の国際理解教育の大切さを我々会員一人ひとりが現地でも実践した貴重な体験を県内全域へ発信させるよう自覚をもつことを望みたい。会員178名がまずそれぞれの学校で、どう自分の体験を生かしていくか、創意工夫して実践して下さることを願っている。

最後になりましたが、この会報に多くの”生の声”を提供していただいた会員の皆様に感謝申し上げますとともに、この会報が県内から海外へ派遣されている先生方と県内の会員の先生方、そして県内の会員以外の先生方との交流の場となり、これからの会員の先生方が2001年の新しい時代の国際理解教育の「さきがけ」となるように願いつつあいさつとします。

本年度帰国された先生方からのお便り

旭村立旭北小学校 長山正宏

幸運にも恵まれ、82年から85年の3年間の南米コロンビアの首都、ボゴタ市にある日本人学校からの帰国後11年を過ぎた96年3月の末、高三、中三、小五の子ども達を連れて渡米した。今回の派遣先は先の全日制の日本人学校とは違い、土曜日だけに授業をす

る補習校への派遣となった。今まで派遣のなかった初派遣，しかも単独校長（委嘱上は教頭）としての勤務となった。今回は補習校紹介ではなく，子ども達の現地校への溶け込みの苦勞，外国語習得の困難を，3人の子どもの通して，特に英語を全く学習せずに小4を修了して外国生活を体験した長女に焦点をあてて紹介する。なお，この投稿文は滞米中に，ある出版社から依頼されたものを加筆したものである。そこで生活すれば自然に語学は身につくという間違っただけの認識を少しでも払拭していただければと思う。

子ども達はそれぞれに，級友との送別会を済ませ，三年分の蓄積をとラーメン屋，寿司屋，カラオケ屋を「はしご」してきたらしい。親の転勤を知らされてから三ヶ月後の出発は，彼らにとって日本との未練を断ち切るには，あまりにも時間が足りなかったようである。

上二人は学校の最終学年を残す事に，「受験勉強」からの解放と，新しい国への期待に喜んでる様子だった。しかし，渡米後，日が経つにつれ現地校での生活，特に学習における言葉の壁はとてつもなく高く，厚かったようで「日本にいる友達の受験勉強の大変さ」に勝るとも劣らない現地校の勉強に「こんなはずじゃなかった」と，日本にいた時以上に辞書を開いている姿も見られた。

よく「日本人は数学はずば抜けている」と言われるが，それは四則計算のことであって，数学が全て計算問題ではない。文章題もあれば幾何もある。「平行」や「二等辺三角形」の言葉がわからなくて，三平方の定理が解けないこともある。彼らにしてみれば，できないことより何を解けばいいのかわからないことの方がストレスだったのだろう。そんな時，親は何をしてやることもできず，ただ「今が過ぎれば，必ず分かるようになる。誰もが通過することだから」と子どもにとともに，自分にとつめ言葉で慰めるしかなかった。

今，彼らはたくましく現地校と戦っており，一年前の「日本との決別」も実現しつつある。

さて，小五の娘であるが，親としては「まだ子どもだから」とたかをくくって連れてきたものの，一番友達との別れを哲学的に悲しんでいたのは彼女だったのではないだろうか。入学手続きの関係で，三人の中でいち早く現地校入りしたのだが，初日は顔見せ程度で帰れると思いきや，「親は帰ってもいいですよ」との温かい？配慮に娘一人を「外国人」ばかりの教室に残してきた。英語の「え」の字も知らない娘を置いてくることの親の心中は経験者にしかわからないことだろう。親が心配ぶりを子に伝えようと視線を送るが，当の娘は視線を合わそうとはしない。親が「さすが子どもだね。もう馴染んでいるよ。」と，親自身が心にも無いことを言って自分を慰めていた。帰ってきた娘に「どうだった？」と主語なしの質問をすると，「みんな親切だったよ。授業も楽しかったし，先生も優しいよ。早く明日にならないかな。」という返事に，「それは良かったね。」と月並みな返事。親としては娘の返事が全て事実と正反対であることは分かっているのだが「嘘でしょ。」とも言えず，自分が弱気になっていること，辛い一日だったことを親に悟られまい，心配かけまいとする娘のけなげさに，涙をこらえて言うのが精一杯だった。事実，次の朝，娘の枕はびしょぬれだった。

その日，スクールバスの手配が間に合わず，自分の車に乗せて学校まで送っていったが，降りてからも娘は「行ってらっしゃい」の言葉に振り向きもせず，背中越しに手を振りながら校舎の中へと消えていった。

親としては，「行きたくないよ。日本へ帰りたいよ。明日は休んでもいいでしょ。」と言われた方がどんなに気が楽か知れない。実際，親に心配かけまいと，必死になって自分の辛さと戦っている娘を見ることの方がはるかに辛いものがある。かと言って，本当にそう言われたら「そんな弱気なことではどうする。みんな，頑張っているんだ。」と言うに決まっている事も事実なのである。

子どもにしてみれば「みんな」は，日本で楽しく生活しているのだ。受験勉強の辛さ，部活動の大変さはあるものの，仲間として，同じ言語で話し，同じ時間を共有し合えたのだ。親はそんな子どもの辛さを理解しながら，海外での生活を余儀なくされた子どもの立場を理解するよう努めなければならない。

その娘も一年が過ぎようとしていたころ、「現地校が楽しくなってきたよ。補習校に行くより土曜日に友達と遊んでいる方がいいな。」と言っていた。彼女の内外にどんな変化があったのかは知らない。わかるのは、濡れた枕が見られなくなったことだ。

辛い生活をしている子どもの姿を見る親の辛さ、「辛」と言う字がやけに生活の中に多かった初めの1年だったような気がする。よく、「アメリカにいれば誰でも自然に英語が話せるようになる。」とか、「子どもは簡単に外国語を覚える。」などの発言を耳にすることがあるが、これほど無責任な言葉はないと思う。逆に、多かれ少なかれ「誰でも苦労する」のが現実だろう。それを乗り越える時、本当にその国の良さ、生活の楽しさを味わう余裕が出てくるのではないだろうか。

海外在住を決意する時、安易に「言語や習慣の自然習得」を子どもに期待してはいけなし、過剰にしり込みすることもないだろう。日本では得られない多くの貴重な体験が彼らを待ち受けていることも事実なのだから。あるリスクを覚悟しつつ、そのリスクを覆い尽くす親の意図的配慮が、子どもに海外生活体験の価値をもたらすのではないだろうか。「＋－0」なら「なにもわざわざ海外にまで」になってしまうが、年少期の海外生活体験が必ずや貴重な経験になることを否定する者はいないであろう。

3年目、娘の学校でESLクラスのオープンハウスが持たれた。英語を第二外国語とする多くの生徒の中で、彼女は学友とお互いの共通言語で談笑していた。両親共々、その姿に再びあついものがこみ上げてきたのは言うまでもない。

「近くて遠い国」から「近くて近い国」韓国へ

真壁町立桃山中学校 笥伸之

「韓国で最も名前が知られている日本人は誰だと思いますか。」と聞かれたら、誰と答えますか。その答えの人物は、韓国名『ブンシンスギル』、つまり『豊臣秀吉』です。ソウルに行っても晋州や慶州そして釜山でも、お寺や公園を訪ね案内板を覗くとたいていの場合、日本と関係のある記述に出会います。『この寺は壬辰倭乱で焼失、後に再建された。』『この公園は義兵なにがしのお墓を中心につくられた。』といった類いの説明です。いかに、秀吉の朝鮮出兵が朝鮮半島に大きな傷痕を残したかを物語っています。私も、3年間でいろいろとそれらの傷痕を訪れ、こんなにもたくさん残っているのかと、心苦しく思ったものです。

中でも、ここ韓国で歴史の先生として教鞭を執っていた朴泰臣前校長先生に案内していただいた4つの倭城の跡が強く印象に残っています。その4つの倭城とは、まず1つは、釜山市の機張郡にある『機張城』、2つ目は釜山市の隣の蔚山市の南部にある『西生浦城』、3つ目は同じく蔚山市にある『蔚山城』、そして4つ目は、本城として中心的な役割を果たしていた『釜山城』です。これらの4つの倭城は、豊臣秀吉の命令で朝鮮に出兵した加藤清正や小西行長らが築城したものであり、今でも石垣の跡がきちんと残っていました。特に、『西生浦城』の規模は、今現在残っている29の倭城の中でも最大級であり、「三の丸」から「二の丸」そして「本丸」へと続く道路の両側の斜面には石垣が当時のままの姿で残っていました。本丸跡に足を踏み入れてみると、日本の武将や殺された朝鮮軍の兵士の亡霊が出てくるようで、不気味な感じに襲われました。まる1日かけ、4つの倭城跡を懇切丁寧に案内していただき、とても感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、こんなにも日本の加害の歴史の傷痕が残っていることを、より多くの人に伝えていこうという気持ちにもなりました。

今後、韓国が「近くて遠い国」ではなく、「近くて近い国」になるためにも、日本人がもっと深く過去の歴史を知り、共通の土台をつくっていくことが必要であると感じています。最後になりますが、3年間という短い間でしたが、韓国という国に赴任することができ

て、とても幸せに思っています。この3年間で出会ったたくさんの人に感謝しながら今の生活を送っています。

在外教育施設派遣教員実践報告（ヤンゴン日本人学校）

報告者：柚木寛文

（現勤務校：土浦市立土浦第六中学校）

パゴダとほほえみの国

紺碧の空。濃緑の椰子畑とコーヒー色のヤンゴン川。天を貫くように黄金に輝くパゴダ…。

東南アジア最西部に位置するミャンマーは135の民族を抱える多民族の連邦国家です。敬けんな仏教徒が約90%を占める国民は温厚で、美しいほほえみを絶やすことはありません。気候は熱帯モンスーン気候で、乾季と雨季にはっきりと分かれています。暑い季節には日中の気温が摂氏40度越える日も多く、年間降水量は2500ミリにも達し高温多雨ともいえます。

1996年の「観光年」の開放政策で観光客が増えホテルの建設が続き、1997年にはASEANに加盟することができました。しかし、軍事政権とアウンサンスーチー女史をはじめとする民主政権との対立、物価上昇、インフラ未整備など問題も山積しているのが現状です。何も起こっていないという側面から判断すれば治安は安定しています。しかし、実際は一触即発の微妙なバランスを保っているだけであり、不安定ともいえます。

在留邦人数は約400人で日本経済の停滞に伴ってここ2年ほど人数は横這い状態です。電気、水、医療面などでの不便さに悩まされながらも互いに声をかけ合って生活し、ゴルフ、サッカー、ソフトボールなどのスポーツに汗を流しながら健康の維持増進に努めている家庭的な日本人社会です。個人的な生活環境については後述します。

当校の特色と実践

○在籍数：（平成12年3月末）

幼稚部 21名
 小学部 30名
 中学部 7名
 計 58名

派遣教員（校長1を含む） 8名
 現地採用講師（派遣教員夫人） 8名
 現地採用スタッフ 16名
 （英会話講師1名、幼稚部講師5名、事務1名、
 膳い2名、庭師3名、バス運転手3名、警備員2名）
 計 32名

○設 備

敷地面積：5906m² 校舎
 は築60年以上のレンガ2階建一
 般家屋2軒分を改造、一般教室
 8、幼稚部教室3、音楽室、理科
 室、技術室、家庭科室、職員
 室、校長室、体育館（無壁）、校庭
 （周100m）、大使館別館と日本人
 会所有のテニスコート1面を併設

1964年、世界で2番目の日本人学校として正式に開校。校名変更を経て創立36年の伝統と歴史を現在に誇って、児童生徒は「かしこく・やさしく・強く生き抜く児童生徒の育成」という教育目標のもと、学業や学校行事に元気いっぱい励んでいます。

当校では現地理解教育の一貫として現地理解オリジナル資料集『ミャンマー』を授業や交流学习の際に活用してきましたが、現在の政治・経済・文化の急激な変化に対応できるものを目指して数年おきに大がかりな改訂作業を行ってきました。

また、宿泊体験学習、海外援助施設見学、僧院での現地交流会など、ミャンマーの歴史や文化に接する校外活動を定期的実施することによって、児童生徒は驚きや喜びを感じ、日本との違いを尊重する態度が身に付いてきています。

このほか、毎年11月には各国の在留教育機関を招待し、「チルドレンズフェスティバル」を盛大に開催しています。ここでは日本の伝統文化を紹介するとともに、各国の文化に触れることによって、国際理解の一助とすることをねらいとしています。和太鼓、

みこし、やぐらを組んでの盆踊りなど、毎年、出し物に頭を悩ませながらも、幼稚部から中学部までが一致団結して特訓を重ね、思い出になる一日を過ごしています。なお、全学年で週2時間、英会話の授業を実施することで、外国後を身近な言語として感じ、積極的に交流を深められる手だてとしています。

またサッカーやソフトボールなど各種のスポーツ大会では、各国の学校との混成チームとともに汗を流したり、競技を通して親睦を深めています。

当校では、年間を通して行われる各種行事や交流会の記録、児童生徒の感想・意見文を年度末に編集製本し、文集「やしの実」として配布しています。卒業生や帰国する児童生徒にとっては貴重な「アルバム」として喜ばれています。また絶えず文章を書くことにより言語感覚を養い、特に低学年においては日本語の基礎確立に役立てたいと考えています。

現地の教育環境

ミャンマーでは仏教寺院の寺子屋教育が普及していたためか、国民の識字率は80%と近隣のアジア諸国に比べて高い水準を保っているとされています。

義務教育は小学校の5年間で5歳で入学する幼稚部の1年間と小学1年から4年までの4年間に分けられ、毎年学年末の成績によって進級が決められます。卒業時には試験の合格者のみが中学校に進学できます。もちろん、経済的な理由で就学できない子供も依然として多いのも事実です。更に地方の民族によっては、学校すらない(必要としない)地域もあります。中学校卒業後は成績によって、入学する高等学校が決められてしまいます。大学進学は教育省による統一試験の成績によって決定され、非常に狭き門になっていて、大学進学は全体の1~2%とも言われています。特筆すべき点としては、幼稚部から英語教育が始められ、最近では高等段階から現地の国語に当たる授業を除いたすべての授業が英語で行われていることです。その他、国際校にはインターナショナル、ディプロマティック、インドネシアン、ロシアン、インディアン、フレンチなどのスクールがあります。

生活環境

最貧国にも名を連ねるミャンマーでの生活は、想像を絶するものがあると思われがちですが、確かにそういう部分もあります。しかし、住めば都と考えて覚悟をすれば新鮮な生活にもなります。先進国の生活を持ち込もうとする意識を少しでもなくして、現地にとけ込み雄大な自然の中でシンプルに生活することへ感謝の気持ちを持ちながら、現地日本人社会と協調して暮らすことを心がければ、それはもう考えようによってはパラダイスでした。

以下項目別に紹介します。

気候	熱帯モンスーン気候。雨季5月~10月、乾季11月~2月、暑季3月~4月。最高気温が40度を越すこともあるが、日陰は過ごしやすい。
水	水道は一日2~3時間の配給。生活用水は井戸水。飲料水はミネラル水または井戸水・ミネラル水を煮沸。水には普段から気をつけている。
電気	電圧不安定。供給も不規則。停電は日常茶飯事。毎日12時間停電のときもある。停電時はろうそくで生活する。またクーラーがきかず、眠れないときは、自家発電のあるホテルのロビーへ避難する。
食料	主食は米で、その他の食材も日本と似ている。しかし、質はすべてにおいて劣る。基本的な食材は現地調達だが、長期休業中または学期中に近隣国にて物資調達。
使用人	6人雇用。ドライバー、コック、ハウスキーパー、ベビーシッター、庭師、警備、うち3家族は住み込み。全員個人契約。月給は約4000円~5000円
交通	交通規則は曖昧で信号等も停電で消えることも日常的。交通連絡網が未発達で現地の人たちはトラックバスに鈴なりに乗っている。路面も荒れているため事故も多い。タクシーは料金交渉制。

情報	テレビは国営2チャンネル。内容は軍事政権の広告のようなものでほとんど見ることはない。実質3年間テレビは見ていない。日本の新聞は当日の午後には衛生版が配達されるが、ミャンマーの記事は切り取られている。
通信	電話は故障多いが通じる。インターネットはできない、E-mailは一時的に普及したが、政府が強制的に停止させる。現在は政府がプロバイダを開設しE-mailのみ使用可能。
医療	衛生管理面では非常に遅れており、外国人が診療する施設はほとんどない。大きな怪我病気は近隣の先進国へ。従って病気をしないことが、生活上での最大の留意事項である。
娯楽	ほとんどない。在留邦人内でサークル的にゴルフ、サッカー、ソフトボールを行っている。

任期を終えて

ミャンマーの生活環境は改善しつつあるものの、政情の不安定さと並んで制約が多いことは否めない事実です。一時期の発展ぶりもアジアの不況と共に停滞気味で、日本企業の撤退が続く中、児童数もピークを過ぎ横這い状態になってきました。学年の人数のばらつきと高学年の減少が目立ち、運営上バランスのとりにくい状態というのは小規模校にとって深刻な問題となりつつあります。また、母親の国籍が日本ではない、いわゆる母国語が日本語以外の子供達への対応や、同時に母親への協力依頼の手段やコミュニケーション難などの大きな課題も抱えています。しかし、そんな不安を吹き飛ばしてくれるかのように子供達の表情はいつも明るく、驚くほど素直でたくましさがあります。自然に学年を越えた連帯意識が身についたり、何事にも積極的に取り組むようになって、予想に反してむしろ充実しているようにも感じます。

ミャンマーの生活は、子供も大人も極めてシンプルです。娯楽もなく、繁華街もない、まるで田舎の小さな村のようです。小さな日本人村であるからこそ、村内での生活は暗黙のオキテが存在し、束縛を感じることもあります。しかし、大人も子供もお互いに目の利くところで”人”と遊ぶことで、素直な心や純粋な気持ちを取り戻していくことを何度も実感することができました。情報化社会で見失いそうなものが、ヤンゴン日本人学校にはあり、見失ってはいけないものをヤンゴン日本人学校で確認することができました。

帰国してから国際理解教育について聞かれることが多くなりました。しかし、国際理解や国際協力などについては「よくわかりません」と答えています。この3年でわからなくなってしまうました。以前考えていたことは、あまりにも浅く表面的であったことはわかるのですが、今の子供達や日本人として何をしたらいいのかがよくわからなくなりました。日本のことを知らなかったのです。勉強不足でした。

この3年間、微力ながらもこの伝統のある学校の教育活動に力を注ぐことができたことは、自分にとって大きな喜びであり、財産であり、今後の活動へのエネルギー源になっていくと思います。

今回の赴任に際しご理解とご支援を賜りました方々に深く感謝いたします。そして、御礼といたしまして、今後もヤンゴン日本人学校を様々な方向から支援していくとともに、気負わず目の前の教育活動に、力を注いでいきたいと思ひます。

「スイス」とは？ こんな国

取手市立寺原小学校 浅野嘉宏

スイスは古くはヘルヴェティアと呼ばれていました。スイスの切手にHELVETIA（ヘルヴェティア）と書かれていたり、郵便や自動車などの国名記号に「CH」と記されています。「CH」は、CONFEDERATIO HELVETIA（ラテン語の「ヘルヴェティア同盟」）の頭文字です。では、スイスはどんな国なのか、基本的なことを紹介していきます。

1 国土・人口

スイスの国土面積は41, 285平方kmで、ほぼ九州の面積に匹敵します。周りをフランス、ドイツ、イタリア、オーストリア、リヒテンシュタインの5か国に囲まれていて、海に面していないのもこの国の特徴です。

人口は、712万3500人(1998年現在)で、人口密度は173人/平方kmとなっています。

2 政治のしくみ

今日のスイスは、26のカントン(州)(準カントンを含む)で構成されている連邦国家です。外交と軍事を除き、各カントンは大幅な権限を有しています。26の小国家が互いの共通の利益のために連合しているといってもいいでしょう。

(1) 立法

スイスの立法府は、二院制をとり、国民議会(下院)と全州議会(上院)で構成されています。国民議会は200議席、全州議会は46議席で、両議会議員は4年に1回改選されます。

この立法システムの中で、最も特徴的なものは、直接民主主義の制度です。

両院で議決されたすべての法案は、5万人以上の有権者の要求があった場合、国民投票にかけられます。憲法改正、条約批准や国家の安全保障に関わる法案に関しては、すべて国民投票にかけられます。そして、個人投票と州の過半数を獲得しなければ法律として成立しないのです。

さらに、国民には、発議(イニシアティブ)と呼ばれる直接請求権が保証されています。10万人の有権者の署名が集まれば、憲法条文の改正、条文の追加を正式に要求でき、国民投票にかけられます。

(2) 行政

連邦の行政上の最高権力は、連邦委員会と呼ばれ、7名の委員で構成されています。この7名が1年任期の交代で、この委員会の議長および大統領を兼任します。

3 スイスの誕生

13世紀、スイスはほぼ全域神聖ローマ帝国の支配下におかれていましたが、ウリ、シュビーツ、ウンテルバルテンは険しい山地にあり、ハプスブルグ家が直接に支配の手を伸ばしてくるまでは、相対的に「自由」を享受していました。そこへハプスブルグ家出身のロドルフ1世が神聖ローマ皇帝に就き、これまでとは事情が変わってきました。中央スイスの住民たちは、ハプスブルグ家の強権と対立する事を余儀なくされたのです。

1291年、皇帝ロドルフ1世が死ぬと事態は一層深刻になり、この年、ウリ、シュビーツ、ウンテルバルデンの3つの地方の代表がハプスブルグ家の支配に対抗して戦うことを誓約した同盟を結びます。これが今日のスイス連邦の始まりです。

4 言語と宗教

(1) 言語

スイスでは、ドイツ語・フランス語・イタリア語・レトロマニッシュ語の四カ国語が国語として認められています。それぞれの言語の使用人口率は、ドイツ語64%、フランス語19%、イタリア語8%、レトロマニッシュ語が1%となっています。そして、上記以外の言語を母国語としている人口がおおよそ8%あります。

これら4つの言語のうち、少なくとも2つの国語を小学校から習わなければなりません。しかし、最近の傾向は「英語」の国際化に伴い、小学校で英語を導入しようとする動きが活発になってきています。

(2) 宗教

スイス人の圧倒的多数はキリスト教徒です。宗教改革の時代にジュネーブを中心に活躍したカルヴァン、チューリッヒを中心に活躍したツヴィングリなどの影響で、プロテスタント人口比率も高く、今日ではカトリック47.6%、プロテスタント44.3%です。

5 日本との歴史的関係

日本とスイスが今日のように深い交わりを持ち始めたのは、日瑞修交通商条約が結ばれた1864年からです。1859年「通商関税局の施設」としてリンダウが日本にきて、通商を求めました。幕府はアメリカなど5か国との貿易だけでも品物が不足して物の値段が上がり、人々が生活に困っていることを理由に、これを断りました。しかし、そのと

き、もし幕府が他の国と通商条約を結んだときは、スイスとも同じ条約を結ぶことを約束しました。

その後、1861年に幕府はプロシアと条約を結んだので、スイスは、アンペールを長とする「スイス国通商使節」を送りました。そして、1864年2月6日に、日瑞修通商条約が結ばれました。当時の貿易品は、日本から生糸、スイスからは時計、繊維製品が主なものでした。

【1998年4月～2000年3月 スイス、チューリッヒ日本人学校勤務】

参考文献

- ・季刊誌「GRUEZI」
- ・社会科副読本「わたしたちスイス」

帰 国 雑 感

里美村立賀美小学校 石井久雄
(サンフランシスコ補習授業校)

日本の冬（茨城）は寒い。耐えがたく寒い。田舎に住んでいる身にとって近所・親戚づきあいの義理ごとに明け暮れたお正月であったが、やっぱり年末年始は日本のお正月に限る。3年間暮らしたサンフランシスコは日本人の多い町であり、食生活に限っては全く日本と同じように過ごすことができる。大晦日には一日遅れの紅白歌合戦も見る事ができる。箱根駅伝だってインターネットで見ることができた。でも、やっぱり華やいだ新年の雰囲気は日本に限る。さて、私が勤務したのは、週一回授業の補習授業校。現地での勤務内容は、担任としての仕事ではなく教育課程の管理や行事の企画運営・現地採用教員への指導や助言等、管理職的な仕事。3年ぶりの日本では、新学習指導要領完全実施へむけての準備を進める移行期間。週に一回基幹教科である国語や算数等の授業を、年間たった45日間程度で実施していた補習授業校では、総合的な学習の時間などへ取り組む余裕はない。また、担任から3年間も遠ざかってしまった私にとっては、本当に「浦島太郎の心境」そのものであった。帰国してからの半年間は、3年間のブランクを埋め、海外ぼけた頭を切り換え、日々の教育活動についていくのが精一杯であった。しかしながら、ようやく3年間の生活を振り返ったり、現在の日本の生活と比べたりする余裕が出てきたところである。補習授業校という存在は日本の教育現場ではほとんど認知されていない。しかし、北米やイギリスでは、何千人もの子供たちが学び、たくさんの補習授業校出身の子供たちが日米、いや世界の架け橋となって活躍しているのも事実である。今後、ますます世界が狭くなり、異文化を体験した子供たちの重要性は高まっていくであろうことを考えると、大変重要な学校であり、そこに勤務できたことは大変幸せなことであった。今後は、この貴重な経験を子どもたちや現場の先生方へしっかり伝えていくことも今後の重要な使命であると考えている。貴重な体験をさせていただいた、文部省・県教委はじめ関係の皆様から感謝申し上げる次第です。

まだまだ近くて遠い国 韓国での実践

下妻市立高道祖小学校 小坂 誠二
大韓民国 ソウル日本人学校勤務

ソウル日本人学校では、5年・2年・6年生と担任する機会に恵まれると同時に、学部主任や研究主任という仕事も経験することができ、様々な改革や日本ではできない取り組みができたことはたいへん有意義な3年間であった。

そのいくつかをあげてみると、6年生の社会科見学では国会議事堂・戦争記念館にスクールバスを使って行っていたのを、地下鉄を使って現地集合現地解散という形に変え、子どもたちに社会性（それまでは子どもだけで地下鉄に乗ったことのある子は一部の子であった）を身につけさせる機会を与えられたこと。また、ほとんど子どもたちは3年間の滞

在期間であるが全校児童のつながりを持たせる機会を作りたいということから、校内の掃除を学年分担制から縦割り制に代えたこと。4・5・6年生で行う秋の登山遠足でも、6年生を中心とした縦割りグループ登山にして、昼食の時間や場所も自由としたこと。

2年生では開浦洞探検（学校周辺の町探検）から始まり、体育館を使っての「市場祭」を開催し、韓国のお金を作ってお店を開き、1年生を招待する学習を行ったこと。最後には学校周辺から、10kmほど離れた繁華街の博物館（近くにはロッテワールドがある）まで、子どもたちが地下鉄や市内バスを使ってグループで子どもたちの力で行って帰って来る学習を行えたこと等々・・・。

また、幼稚部・小学部・中学部の3学部をあわせて「生きる力を育てる総合的な学習の研究 1999年～2001年」の初年度の計画を研究主任として立案できたことも有意義であった。文部省の研究補助もいただき、韓国の先生方に授業を公開する研究会も毎年行っている。今年は180名の参観があったらしく、日韓の教育界の交流の基礎になっているようである。

最後に、昨年暮れ家族でソウルを訪問したが、改めて食べ物のおいしさ、市場の賑わい、韓国人の優しさに触れ、3年間の時のすばらしさを実感している今日この頃である。

大洗町立祝町小学校 皆川正巳

「センセエ、ドリョクハアタリマエヨ！」

ホーチミン日本人学校が平成9年度に開校したときに雇ったベトナム人女性スタッフのフンさんは、片言の英語とベトナム語しか話せなかった。月150ドルの給料は、ホーチミンの女性の中では破格であった。

彼女の仕事は、朝5時に自宅を出て、スクールバスの添乗員として日本人学校の児童生徒をピックアップし、学校に来ると事務員の手伝いをして、下校時にまたスクールバスの添乗員として、児童生徒を安全に家に届けることであった。

はじめは、日本人からの電話も受けることができなかった。すぐに「チョットオマチクダサイ。」と言って、我々に受話器を渡していた。そのときの顔が大変悔しそうだった。

そんな彼女は、日本語のテキストを買い込んで、仕事の合間にいつもいつも読み書きの練習をしていた。わからない言葉などがあると、職員室にいる教員に意味や書き方を聞いたりして、とにかく一生懸命だった。もちろん、赴任した我々もベトナム語の勉強になるのでそれに答えたりしていたが、我々が勉強する速度と彼女が勉強する速度とは雲泥の差があった。

3ヶ月後、彼女は電話の用件をきちんと日本語でメモをとり、我々に伝えるまでになっていたのである。彼女は帰宅すると日本語学校と英語学校に通い、勉強していたのだ。150ドルの給料のほとんどを月謝に充てていたのだという。

「フンさんすごいね。」と言うと、「センセエ、ドリョクハアタリマエヨ！」と言われた。

社会事情は大きく違うにせよ、ベトナム人の向学心に脱帽である。

現状にすぐに満足し、努力が嫌いな私にとって、「ドリョクハアタリマエヨ！」と言うフンさんの言葉は、誰に言われるよりも重みがあった。少しでも見習って、がんばらなくちゃなとは思っているが、思っているだけ？である。

ホーチミン赴任のお土産に、フンさんの爪の垢でも貰ってくればよかったなと思っている今日この頃である。

ホーチミンの通勤風景



在外教育施設に派遣されている先生方からのお便り

イタリア ミラノ日本人学校

大内 智博

はじめまして。ミラノ日本人学校の大内と申します。



ミラノは、商工業、金融の中心地であるとともに、デザイン、ファッションなどでも常にイタリアの先端をいく創造力と活力のあふれる街です。市の中心に高くそびえるミラノのシンボル、ゴシック様式のドゥオーモ（大聖堂：添付の写真）は、ミラネーゼの誇りです。他にも世界最高の格式と伝統をもつオペラ劇場のスカラ座、ガレリア・ビットリオ・エマヌエーレⅡ世、スフォルツェスコ城、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」が描かれているサンタマリア・デレ・グラツィエ教会など、国の遺産ともいふべき有名な建築物や美術品があります。

ミラノ日本人学校は、今年で創立25周年、小・中併せて約120名の児童・生徒が在籍しています。1学期には市内の競技場を借りての運動会、6月には縦割りのグループで活動する小学部の遠足、フィレンツェ、ピサ方面への6年生の修学旅行、7月にはスイス国境のアラーニャという街での中学部の体験学習などがあります。

2学期には、名所・歴史的建造物をモチーフに写生大会が9月に、各クラスすばらしい発表を見せてくれる学習発表会が10月に行われます。大きな行事の合間をぬって、現地校との交歓会や、老人ホーム慰問、各学部の集会などがあります。

3学期は、書き初め大会、もちつきなどで幕を開け、2月には図工・美術の授業で制作した作品を、作品展で発表します。

私は現在8人の生徒が在籍する中学2年生の担任をしています。そして何より小学1年生から中学3年生までの図工・美術の授業を担当しています。4月に着任した当時は、材料（教材）の入手もままならず、四苦八苦しました。どうしても描画に偏ってしまいがちでしたが、1学期中盤からどうにか軌道にのって授業を進められるようになりました。イタリアならではの教材ということいろいろ考えました。例えば小学1年生の図工ではパスタに色を塗ってアクセサリーを作らせました。さすが本場というだけあって、様々な形・大きさ・色のパスタがあり、子どもたちも楽しんで活動していました。3年生にはワインのコルク栓を利用した工作などにも取り組ませました。そして我がクラス中学2年生には、イタリア芸術を語る上で欠かせない「テンペラ画」に挑戦させました。まずミラノ市内にあるブレラ美術館でマンテーニャの「死せるキリスト」を見せ、ミラノ在住の抽象画家のアトリエを見学させてもらってから、活動に入りました。顔料を卵黄で溶く、オーソドックスなエッグ・テンペラの技法を用いて、「心の中の世界」を抽象画で表現させました。途中防腐剤として用いた食酢の臭いに大騒ぎしながらも、初めての「絵の具づくり」を楽しめたと思います。イタリアにはフィレンツェのウフィツィ美術館のポッティチェリの「春」「ヴィーナス誕生」などテンペラ画の有名な作品があります。このテンペラ画に触れることで現地理解の第一歩となるのではないかと考えました。

まだこれからいろいろなことに挑戦させていきたいと思います。

「シンガポール教育事情」

シンガポール日本人学校 小学部クレメンティ校 鈴木 隆

私の勤務するシンガポールは、華人、マレー人、インド人を中心として、欧米人や日本人等様々な民族が生活する他民族多元社会です。当然意志の疎通が問題となりますが、国語であるマレー語よりも英語を実用語としてコミュニケーションの手段としています。

さて、ここシンガポールの子どもたちが通う地元の学校では、日本の学校とどの様に違

うのでしょうか。「振り分け制度」と言われているほど、小学校から高等教育まで、多様なコースがある教育システムで、進学熱は日本と同様にすごいものがあります。わが子がよりよいコースを歩めるようにと評判のよい名門小学校にやりたくて、引っ越しをしたり、先ごろは住所を偽って登録する親がいたことが発覚したというほどの加熱ぶりです。

シンガポリアン（シンガポール人のこと）の小学校児童数は30万人、中学校の生徒数は17万3000人ですが、昨年の地元ストレートタイムズ紙の調査によると、シンガポリアンが一年間に費やす子どもの家庭教育費は3200万ドルに達するそうです。

地元の小学校は一律に、四年生と六年生の時に試験があり、振り分けがなされます。私の勤務する日本人学校の現地職員の方に話を聞いたのですが、4年生の時の試験は敗者復活ができるのでまだよいが、6年生の卒業試験は皆必死で勉強するそうです。昨年のシンガポール教育省の発表によると小学校卒業試験を受けた5万4734人のうち、5万2450人が合格し、中学に進学できるようになり、合格率は95.8%です。合格者のうち59.8%の生徒が特別（スペシャル）コースか快速（エクスプレス）コースに進み、35.9%が普通（ノーマル）コースに進学します。小学校卒業試験に合格出来なかった2284人（全体の4.2%）中、2002人は留年し、規定の年齢制限を越えてしまう残りの282人は職業訓練校に進みます。

そして、この様に教育熱心な国であるシンガポールには、実は義務教育制度がありません。（!）

義務教育をごく当たり前としてとらえている私たち日本人にとっては、少し驚くことですが、基本的には国民は学校に行こうが行くまいが本人あるいは親の自由、ということでした。

しかし、独立後35年たち、一昨年あたりから義務教育導入の法制化案が出され、昨年（2000年）末に義務教育法が成立しました。2003年頃から施行される予定です。この国らしく、子どもを小学校に通学させない親に対して、罰金5000ドルと懲役1年以下の罰則が定められています。

他民族国家シンガポールにようやく義務教育制度が生まれたのです。

ワンダフル・ライフ

ニューデリー日本人学校 飯島康之

- (1) 「出会いと別れの間」である日本人学校のすばらしさ
我が校は全校で70名程であり、各学年は10名弱の単学級です。新しい一人の友達が転入してくれる喜びは大きく、大切な一人の友達が転校していく悲しみもまた大きい。人の心を思いやり、いっしょにいる今を大切に生きるような子ども達が育っています。
- (2) 国際理解・現地理解の主任を担当して、世界観が変化
今年度、学校の柱のひとつである国際・現地理解教育担当となり、インドの現地校やインターナショナルスクール（アメリカン、ブリティッシュ、ロシアン、ジャーマン、フレンチ）と交流教育をしました。各校の実情を理解し、計画実践するコーディネーターとしての仕事はやり甲斐があり、最も達成感を感じた仕事でした。特に印象に残ったことをあげてみると、
 - ① インドの現地校ブルーベルズスクールへの訪問・来校は、30年以上も続いています。今では本校の生徒達も、ブルーベルズの生徒を兄弟のように親しく感じています。
 - ② ニューデリーにある国際校とサッカー・バスケットボールの交流試合をしました。日頃、競い合う経験が少ない日本人学校の生徒も、この時は燃えました。
 - ③ ヒンディー語教室のおかげで、英語を話せないインド庶民ともコミュニケーションをとることができるようになりました。片言の現地語を話せるだけでも、インドの人達と触れ合える喜びが大きくなります。
 - ④ ヨガ教室は、インド文化の奥深さを教えてくれます。単なるポーズだけではなく、メディテーション、呼吸法、ポーズ、哲学を含む総合的な「生きる知恵」がヨガです。私は、リシュケシュのヨガ・アシュラム（道場）に春休みと夏休みに修行に行きました。インドの哲学は、現代でも生き続けています。

(3) まとめ

異文化に触れて、日本の文化の良さや限界を改めて考えさせられました。これからも広く国際社会で生きていきたいと思えます。そして、帰国後はこの三年間で学んだワンダフル・ライフを、日本の子ども達にも伝えていきたいと思っています。

ウィーン日本人学校 校長 会川 忠雄

♪ 緑濃き ウィーンの森に こだまして 理想にもえる 歌声は 宇宙はるかに あまかける ああ 学舎の 空たかく ♪ ウィーン日本人学校の校歌が吹き抜けになっている明るいホール一杯に広がる。校舎は、遠隔暖房システム（日本のゴミ焼却工場にあたるものだが、暖房優先の発想がその名称に表れている）の恩恵で真冬でも半袖で十分。広い頑丈な二重ガラス窓の外に目を移すと、そこは銀世界。先ほどから降り出した雪が芝生の校庭を一変させ、今も粉雪が舞っている。

少し時間を遡るが、10月末に学芸会を開催した。いかにも古めかしい名称だがドイツ語ではシュールフェスタ（学校祭）という。本校の近くにウィーン第22区公民館があり、そのステージつきのホールを貸し切ってかなり大々的に行っている。

芸術の都を意識して児童生徒も職員も力が入る。ちなみに、ウィーン市内は1区（ステファン寺院などのある中心街）から23区まであり、本校の位置する第22区はドナウ川の東に位置し、国連ビル群なども林立している比較的新しい地域である。学芸会には、小学部1年生から中学部の生徒まで全員が出演する。演目は、日本昔話から脚色したものや、オペレッタ、環境をテーマに取り上げたものなど様々だ。

クラスの人数が多くとも12名で、全員が主役となる。「深めろ友情、光の中へ、熱いドラマが君を待っている」とのスローガンのもとに、2ヶ月ほど前からコツコツと練習を積み重ねてきた。放課後はスクールバスの時間に縛られて練習に当てることはできない。幸い本校は弁当持参である。給食ではないので、20分もあれば昼食がすむ。この昼休みが貴重な練習時間だ。衣装や小物づくりには保護者も全面的に協力してくれる。

この学芸会も回を重ねるにつけ、近隣の方々も参観に来られるようになってきた。学芸会大成功の後の職員の反省会は、1区の酒場（ケラー）へと繰り出した。子供達の活躍ぶりを話題にして大いに盛り上がったことだ。

次に控えているのは、スケート教室だ。アルテドナウ（ドナウ川の三日月湖）の岸辺が凍り始めるのを、今か今かとスケート好きウィーン子が待っている。しかし、年々温暖化が進んでいて、なかなか全面結氷とまではいかないようだ。本校では、すぐ隣にある市営のアイススケート場で、体育の授業やクラブ活動でスケート教室を実施している。

さて、12月にはクリストキンダーマルクトがラートハウス前の広場等にオープンする。広場に隣接する公園の樹木が電飾され、100軒ほどのシュタンドル（出店）がクリスマスへの雰囲気盛り上げる。温めた赤ワインやキンダーパンチ（ノンアルコールの飲み

物）をいただき、クリスマスツリーの飾り物を品定めする家族連れで、大変な賑わいである。ラートハウス（市庁舎兼公民館）の中に入ると、子供達の体験コーナーがある。飾りローソク作り、クッキーづくり、ガラス玉へのマーレイ（絵描き）等、コースは様々で事前に申し込んでおけば、小学生から高校生まで参加できる。本校児童も毎年参加し、今年も得意げに作品を持ち帰ってきた。

2000年9月1日

創立22周年記念式典終了後の全校児童生徒記念写真です。



彩りの街コタキナバルより

コタキナバル日本人学校長 小出 治夫

コタキナバルはボルネオ島の北部、東南アジア最高峰キナバル山を背後に頂く、東マレーシア、サバ州の州都である。懐の深い自然の中にイスラムの緑、中国の慶事を祝う赤、そしてインド料理に欠かせないターメリックのきいろが鮮やかな、あやどりゆたかな街である。

日中は突き刺すような強い日差しが照りつけるが、心地よい一陣の涼風をほのかに感じたならば、間もなく黒雲が広がり、雷鳴とともに大粒のスコールが降り出すであろう。強い日差しにスコール。おおむね一年中こうした天気が続く。入学式も、夏休みも、もちろん正月も、暑い。

市場ではキナバル山の裾野で育てられたキャベツやレタスが目につく。熱帯の地でありながら高原野菜を食べることができるのは、実にありがたい。もちろん熱帯特有の色とりどりのフルーツとともにである。

市場にはそうした新鮮な野菜、フルーツを求めて大勢の人々が集う。マレー系住民をはじめ、中国系、インド系ボルネオ古来の民族などなど。モスクのすぐ近くに中国寺院があったり、教会があったりする。多民族国家ならではの光景だ。治安のよさは互いの文化を尊重する気風ゆえであろうか。一国でありながら、異なる民族が独自の文化を守り、干渉することなく、淡々と1日1日が過ぎてゆく。

本校の概要

本校は文部省より在外教育施設として認定されて以来本年で19年目を迎える。コタキナバル日本人学校は他の日本人学校と同様私立学校である。コタキナバル日本人会附属となっており、学校の運営面については、日本人会長より委託された3名の学校理事と総領事館、PTA、学校から選出された委員を以って学校運営委員会を構成し、各委員の無償奉仕により学校運営がなされている。

本校の教育目標は「自ら学び心豊かな子どもの育成」の下、豊かな人間性と国際感覚を身につけた、心身ともに健全な児童・生徒の育成に努めるとともに、社会の変化に主体的に対応していく能力と自立していく態度を身につけようとしている。

また本校の特色として小規模校の利点を生かし、児童・生徒の個性に応じた指導に力点を置いている。学年の壁もなく、縦割り集団の生活形態がとられ、小学生から中学生まで一緒になって遊び、学習したりしている。

交流・自然・創造の一端

ボルネオという魅力ある地域の日本人学校として、特色ある教材を提示すれば、児童・生徒の興味・関心を引き出すことができる。児童・生徒のみならず、いつのまにか教師も夢中になって活動している。

たとえば日本にない動植物。直径80センチメートルにも達するラフレシアの花は、どの図鑑を調べても「肉の腐った匂いがする」と記されている。しかし実物を見て驚かされた。本にあるような事実はないのである。それならばボルネオに生きている私達が真実を追究してみよう。子ども達は授業のみでなく、家族で出かけた際にもラフレシアが咲いているという情報があれば観察して「臭いはなかったよ」と事例報告に来る。一つ一つ実物を調べるたびに、ますます好きになっていく。

世界最大のウツボカズラもキナバル山固有種。ここにしか自生しない。2リットルもの容積がある補虫袋をつける理由は、栄養の乏しい土地に根づいてしまったからこそ。自然の厳しさと生命の力強さを感じずには入れられない。同時に人間の生き方をも自問する。

他校との交流では、国際結婚の子ども達が大活躍。自分の家庭に異文化がある子ども達は「言葉の壁」も文化の違いも感じていない。そんなことは「あたりまえのこと」なのだから。このたくましが21世紀の地球のエネルギーとなるだろう。体験活動を重視しインターナショナルスクールや地元校との交流活動、マレーシアの料理を味わい、ここならではの工芸品を

作る。そして大自然を自分の五感で感じることを教育活動に取り入れている。



おわりに

マレーシアは2020年を目指し先進国の仲間入りを目指している。治安もよく、気候も暑さを除けば1年を通じて穏やかな地である。ただ昨今の経済情勢から児童生徒数の減少は本校だけの課題でないようである。少ない人数の中でいかに子ども達に日々の教育活動の中で切磋琢磨させるかが大きな課題である。交流活動や体験入学を通じいくらかでも刺激を与えられたらと考えている。

文部科学省、県教育委員会、鹿行教育事務所、茨海研の先生方のご支援に感謝し、残された職務を全うしたいと思います。



遠くて遠いルーマニア

2000年度派遣 ブカレスト日本人学校

柴田 均(原籍校 東海中学校)

「ルーマニアをご存知ですか？」シドニーオリンピックの女子体操で一躍脚光を浴びました。あの、ラドゥカン選手が住んでいるところです。ヨーロッパの東南部に位置し、北はウクライナ共和国・モルドバ共和国、西はハンガリーとユーゴに面しています。と書いても知っている国名はいくつありましたか。本当に、ここは「遠くて遠い国」なのです。

首都ブカレストは、東経26度9分、北緯44度25分、海拔82mにあり、緯度で比べると北海道旭川市よりやや北に当たります。あの独裁者チャウシェスクが旧市街を破壊し19世紀に「小パリ」と言われた面影はありません。1965年にチャウシェスクが政権を握ると、極端な工業至上主義と権力の独裁によって国民の生活は低下していき、不満をもった市民たちの手により、ティミショアラで起こった市民蜂起を端緒にしてチャウシェスクを倒し革命を起こしました。今での市内の建物には銃弾のあとがあります。民主化・自由経済の道を歩んではいますが、前途多難です。ここまで読むと少しわかりますか。

東欧圏唯一のランテン系民族であるルーマニア人は、陽気なはずですが、暗いチャウシェスク独裁時代のおかげで影が見られます。警察官も含めて役人への賄賂は日常茶飯事で、外国人が、この国の面倒な手続きを円滑にこなすのには欠かせません。今の日本人には信じられないような国、ルーマニアですが、我々は力強く生きてます。

我がブカレスト日本人学校は、生徒数22名、高級住宅街の一角の建物を借りて頑張っています。子どもたちは、大使館員・商社駐在員の家族がほとんどで、海外生活の長い子も多くいます。治安の問題から家の外で子どもだけで遊ぶことができません。学校では、課外活動で子どもたちの運動不足を補っています。皆生活は大変ですが、明るく伸び伸びと育ってくれています。派遣教員も6人という小規模ですが、お互いに助け合いな

がら学校の運営と教育に携わっています。ルーマニアは、喘ぎながらも何とか前進しようとしています。その支えになっている在ルーマニアの日本人のために働いているのだという使命感に燃える毎日です。(雑感)

ニュー・ヨーク日本人学校グリニッジ校 菊地 健一

ニュー・ヨーク日本人学校は、コネチカット州グリニッジの閑静な住宅地にあります。グリニッジはニューヨーク州に隣接しており、マンハッタンまで電車でも車でも約50分の距離にあります。春は桜、夏は新緑、秋は紅葉、冬は銀世界と四季に富んでいます。広大な敷地のなかに歴史的建造物に指定された校舎で、初等部1年生から中等部9年生が学んでいます。本校の教育目標は、「進んで学習しよう」「思いやりの心をもとう」「健康な体をつくろう」「アメリカ社会を理解しよう」の4つです。特に「アメリカ社会を理解しよう」に向けて文化や習慣の違いを学んだり、アメリカの歴史や国土について学習をしています。

さて、今年度は新学習指導要領を移行する年度ですので、教職員の知恵を集結して見直し、改正をしました。また、体験学習の重視で、5年、6年、7年、8年生で宿泊学習を実施し、理科や社会科を中心とした移動教室もありました。そして、各学年では現地校との学校間交流が実施されました。(これは、現地の生徒との交流を通してアメリカの文化を知り、書道や剣道、けん玉、折り紙、日本語などを教え日本の文化をもっと知ってもらうことが主な目的である。)最後に、総合的の学習の時間が設定され、従来の教科の枠組みでは、捉えきれない課題解決学習に取り組みました。

その中で、私は8年生(中学2年生)の担任、理科、技術科、初等部1年生から6年生までのコンピューター指導にかかわりをもちました。2月修学旅行では、アメリカの中心と同時に、世界の中心であるワシントンD.C.に行き、ホワイトハウスやFBIそして日本大使館などを見学しました。また、博物館に飛行機や恐竜の骨などをまるごと展示してしまうことからアメリカの大きさを感じました。理科においては教材、教具が充実しており生徒が自ら体験をする授業が展開できました。技術科に関しては生徒の転出入が多いので、題材を慎重に選ぶ必要がありました。初等部1年生から6年生のコンピューター指導では、特に低学年で、わかりやすく説明するための言葉遣いで、中学校にはない指導上の苦勞がありました。今年得たこの経験を来年度以降の在外教育施設における国際教育活動に生かしていきたいと考えております。



理科の授業から



1~9年生の運動会

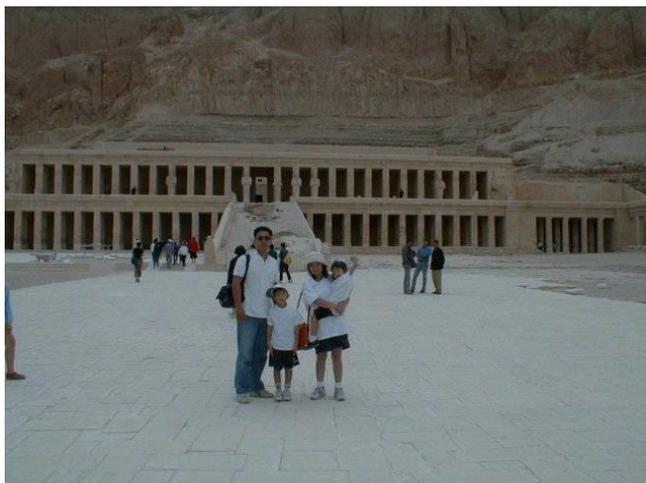


8年生の担任学級

「エジプト感覚」

在エジプト国カイロ日本人学校

教諭 浅野光省



もう通り慣れたピラミッドが見えるハイウェイで、ドライバーの運転する自分の車に揺られながら指導案の内容を確認したり、表現運動の曲を何回も聴いてみたり・・・、幾度となく繰り返されるギアチェンジの音にも、車の窓越しに、ビルの谷間を抜けるたび、その姿を変えるピラミッドにも、関心が薄れてきた頃、エジプト人社会の構

造や宗教の束縛にストレスを感じながら生活している人々の気持ちや考え方が見えてきました。学校では、文部省の海外子女教育研究指定を受けて、平成12・13年度と進めていくことが決まって、現在、その実践に取り組んでいます。毎日が忙しく、目まぐるしく時間が過ぎていくような気がして、そう感じることも、日本人の特性なのかもしれません。一方、エジプトの人たちは言う、見ている限りでは、一日の時間の流れが非常に緩やかで、あくせく働くことなく、一日の時間を楽しんでいるようにもとることができます。そんな、特性も、ここエジプトならではの土地柄や歴史、文化にも影響するのではないかと思います。

イスラム教は、5つの行をすることで知られていますが、戒律は厳しいと言われていいます。ですが、いろいろな面で、厳格な人も威厳のある人もいることは確かですが、多くは、これとは、正反対の人の方が多いようです。「時間を守らない」というのが、エジプト人を語る日本人の口癖になっているくらいで、だれもが一度は経験していることだからではないのでしょうか。長い歴史と優れた文化・悠久のナイル川を持つエジプトで、時間を守れない、いい加減なエジプト人たちを見ると、なんとなく不思議な気がします。いつしか、その流れに流されてしまい、自分も時間を守れない人間になっていきそうな気がして、そんな錯覚を見てしまいます。そんなとき、決まって、エジプトの人は、「マーレーシ（仕方がない）」といいます。時間に遅れるのは、いろいろな事情があって仕方がない事は分かりませんが、明らかに自分の責任で遅れてしまっても「マーレーシ」なのです。この言葉は、神様がいたずらしたのだからしょうがないじゃないか・・・と、彼たちは言います。自分たちの都合の良い解釈をすることも得意なわけで、日本人とエジプト人を比べ、違いや良い面悪い面をみつめ直し、知ることで、エジプトを理解しつつ、しばらくは、また、マーレーシにつきあいながら、自分の糧にしていければと今は考えています。

ニュー・ヨーク日本人学校ニュージャージー校における国際理解教育活動について
ニュー・ヨーク日本人学校 ニュージャージー校

教諭 上野 真央

はじめに

本校では、本年度の校内研修のテーマを「国際理解教育」と定め、その柱となる①コミュニケーション能力の育成 ②現地理解教育の推進 ③日本文化の紹介の実現のために取り組んできました。本年度の活動を（１）授業を通して（２）行事を通して、に分けて紹介したいと思います。

（１）授業を通して

初等部では毎日１時間、中等部においては週２～３時間の米国人教員によるレベルに合わせたESLの授業が行われています。また、単に英語力の習得だけでなく、その力を行事の中で生かし、体験することで、文化・生活習慣なども学んでいます。例えば、10月末のハロウィンでは、パンプキン狩りをし、ジャコランタン作りをする

ことでアメリカの習慣を味わいました。

さらに全校生が、Artの授業を米国人教員から学んでいます。英語でコミュニケーションを図ることで、英語力もさらに深まり、またこちらならではの豊かな色彩感覚による指導で、子供たちの作品も色彩豊かな、素晴らしい作品に仕上がっています。

(2) 行事を通して

本校では、現地の環境を生かした行事がたくさん組まれています。ここでは、昨年度新設された中等部の行事を中心に紹介していききたいと思います。

① 現地校との相互学習交流会

近隣の現地中学校との2日間の交流（相互に訪問しあって授業に参加）を通して、現地の学習内容や習慣を学ぶと共に、日本の紹介者としての役割を十分に果たしていました。

我々教職員も、現地の生徒を相手に授業を行いました。授業の中では、各生徒が現地の生徒たちに通訳をし、共に楽しく授業に参加することができました。

② 社会科移動教室

本年度から新しく行われたこの行事では、互いに協力し、アメリカ社会を理解することを目的とし、学習の場を教室からマンハッタンに移して、自分たちで調べ、考えた見学経路をもとに、地下鉄などの公共交通機関を利用して行われました。当日は朝からサンダーストーム（台風）にみまわれ、なかなか予定通りに進まなかったことで、机上の学習と実体験との違いを身をもって経験できました。

③ 修学旅行

今年度は、首都ワシントンDCへの修学旅行が行われました。テーマを「世界の首都との比較」とし、各個人が課題をもって参加できました。ホワイトハウスやアーリントン墓地などを訪れ、アメリカ合衆国の歴史に触れることのできた2泊3日の旅行でした。

おわりに

赴任して2年、この間に帰国に伴い別れた児童・生徒は41人（平成13年1月22日現在）にもものぼります。全校生が100人に満たない本校において、この1回ごとのお別れは周りの友達、そして教職員にとっても、辛い出来事です。「この子のために、何ができたのか？」と思うとき、あらためて異国に生活する子供たちの支えになり、また異国の良さを知って帰国させられるよう努力していかなければと思います。

スペイン（カタルーニャ）事情

バルセロナ日本人学校 秋場義明

昨年は、見ること、聞くこと、食べること、その他全てにおいて「新鮮」「驚き」「感動」の連続でした。今年は昨年の経験と知識を生かし、スペインとりわけ私の生活している「カタルーニャ県」について紹介したいと思います。

カタルーニャ県はバルセロナ、ジローナ、ジェイダ、タラゴナの4県で構成されています。芸術や建築で有名なガウディの作品をはじめ、世界レベルのものが数多くあります。今回はその中から2つ紹介したいと思います。

スペイン（カタルーニャ）のワイン事情

実りの秋 スペインはぶどう作付け面積世界一！！

ご存知でしたか。スペインはワインでも有名なのです。ぶどうの作付け面積は世界第1位ですがワイン生産量では世界第3位にとどまっています。理由は「原産地呼称制度」などによって厳しく品質管理をしているからです。原産地呼称制度とは、ぶどう原産地、品種、栽培面積から醸造法にいたるまで厳しい条件をパスした産地にだけ許されるもので、現在スペインには53の原産地呼称ワインがあります。今回はその中でも由緒正しいペネデス（バルセロナを中心とした産地）のTORRES（トレス）というボデガ（ワイナリー）を紹介しましょう。

昔はすべて樅の木の巨大な樽で醸造し、小樽に入れて寝かせていました。この小樽はワイン用に30年、その後ブランデー用に10年使われた後、机や椅子などの家具の材料として利用されるということです。

しかし近年、機械化が進み巨大樽がステンレスのタンクに、手摘みだったぶどうもトラクターで摘み取られるようになりました。



研修

スペインワイン講座

スペインでは赤ワインが特に有名です。他に白、ロゼ、そしてカバがあります。カバとは、シャンパン式醸造法で作られたスパークリングワインです。赤以外は冷たく冷やして飲みます。またアンダルシア地方ではヘレス（シェリー酒）が有名です。ワインにはグラン・レゼルバ（ぶどうの当たり年にのみ作られるもの。赤は2年以上樽で熟成し、3年以上ボトルで熟成。白とロゼは4年以上樽とボトルで熟成させ、うち半年は樽で寝かせたもの）とレゼルバ（赤は樽とボトルで3年熟成し、うち1年以上は樽で熟成。白とロゼは樽とボトルで2年熟成させ、うち半年以上は樽に寝かせたもの）があり、樽で熟成させない早飲みタイプの若いワインのシン・クリアンサというものもあります。お近くのワイン売り場で探してみてください。



スペイン(カタルーニャ)のスポーツ事情

スポーツの秋 FCバルセロナはカタルーニャの華だ！！

わたしの住んでいるピソ（アパート）から歩いて5分のところにamp Nouスタジアムがあります。

ここは1982年のワールドカップの舞台にもなったヨーロッパ最大のスタジアムです。収容人員11万5000人。ここをホームとするクラブチームそれはFCバルセロナ。レアル・マドリッドとともにスペインを代表するチームです。

バルセロナ市民が親しみを込めて「バルサ」と呼ぶこのチームは、まさにカタルーニャの象徴。国内最大のライバルはレアル・マドリッド。このレアルは王室から授けられた称号。バルサもその称号に充分に価する実績を持ちますが、カステイリャの王室からの称号という事で、決してこれを受けず「バルセロナ市民チーム」を貫いています。そしてチームのエンブレムにはカタルーニャ旗のデザイン。こんなところも、民族意識の強いカタルーニャの人々に愛されるゆえんです。

ちなみにカタルーニャの人々は自分達をスペイン人とは言わず、カタルーニャ人だ



とっています。日本のプロ野球の巨人・阪神戦とは根本的に違うのです。ですから、このスタジアムでバルサとレアルの試合があるときはとても大変なのです。ときには・・・。

香港日本人学校小学部香港校 櫻井孝之

本校校歌の中にある『一、青い海 白い波 自由の港 香港 二、緑の丘 華の窓 太陽の国 香港 三、真澄の空 そよぐ風 平和の港 香港』の歌詞は、この街にぴったりの表現です。

夜景で有名な香港島・九龍半島は、世界有数の貿易港・金融街をもち、各国から様々な国籍の人々が集まってきました。面積の九割は、新界と呼ばれる地域と二百を超える離島からなり、緩やかな四季と亜熱帯の景観を楽しませてくれ、思ったより自然が多く、野鳥の鳴き声で目が覚めます。近くの公園では早朝からジョギングや太極拳をする人々が見られ、活気に満ちあふれ・・・近代ビルと自然、様々な国の人々。香港は、一つ一つはバラバラでも、できあがりすばらしい「パッチワーク」のような都市です。

そんな街にある香港日本人学校は、小学部香港校、小学部大埔校、中学部の三校からなっています。私が勤務する小学部香港校は、香港島中程、山の斜面を削ったような所に建ち、地下二階、地上五階の校舎をもつ学校です。以前は児童数二千名をを越える時期もありましたが、現在は二十五学級、児童数八百名弱と教職員四十数名で教育活動に取り組んでいます。英会話の時間が各学年2時間ありネイティブスピーカーの先生が教えてくれていますし、各国のインター校や中国の小学校、現地の学校とも交流しているなど、日本ではなかなか得られない環境で子どもたちは元気に学んでいます。言葉が通じなくても、日本の良さを伝えたり、相手の文化を受け入れようとする態度が養われています。もちろん、教育課程は日本と同じで、「総合的な学習の時間」も「香港タイム」と名付けて行っており新教育課程に向けての研修もそれと併せて進めています。

さて私ですが、九重小学校では担任を離れておりましたが、6年生1組の担任になり、明るく素直な子どもたちと一緒に、初心に戻って毎日楽しく学習や運動に励んでいます。2学期には、運動会や音楽会、そして中国広州への修学旅行と日本と同様に行事が続きました。1つ1つの行事がどれもこれも日本とはひと味違った体験であり、新鮮な驚きや感動があります。パッチワークのような都市、香港での、これら一つ一つの貴重な体験を生かし、子どもたちが国際舞台の様々な場面で活躍できる人になってほしいとの願いを忘れずに、私自身にとっても肥やしになるよう、今後も頑張っていきたいと思います。



自宅ベランダよりビクトリア湾を望む
(手前の木があるところがビクトリアパークです。)

ジョホール日本人学校に赴任して

久保和文（平成12年度派遣）

ジョホール・バルはマレー半島の最南端、幅約1kmのジョホール水道を隔てて、シンガポールがすぐ南に見える街です。松下電器、アイワ、ケンウッド、日立などの電気・電子メーカー、石油化学関連の企業が進出し、約1000人の日本人が居住しています。日本人学校は4年程前に設立され、マレーシアで4番目の新しい学校です。それまで毎朝パスポート持参でシンガポール校に通っていた子供たちの父母から、「市内に通える日本人学校を！」の強い要請を受けて開校されました。日本人会の学校運営委員会によって、最終的に管理統括されています。

学校は市内から東へ約20kmの郊外にあり、小学部115名、中学部30名（派遣教員14名＋現地採用教員4名）の小規模校です。ほぼ全員が毎朝5台のスクールバスに分乗して登校します。人数が少ない分、小中とも子ども同士の間が親密で、子ども・父母と教員の情緒的關係も深く濃くなり丁寧に面倒を見ること、またせっきくの海外の学校であることから、できるだけ多様な現地理解の校外学習や国際交流のプログラムを企画、実施すること等を心がけています。小中とも毎週2時間の英会話の授業・校外実習もあります。

今年入学児童に日本語が流暢に話せない子や、長期滞在の生徒で生活言語としての微妙な日本語のニュアンスや学習言語としての基本的用語に慣れていない生徒が若干いて、少し驚きました。日本人学校というところでも私たちは「海外にあって日本と同じ学習をしているはず」と思い込みがちですが、子ども個人の海外での生育歴や授業観察を通してより理解を深める必要があると感じました。さらに、国際化・グローバル化が進む中、今後の日本人学校のあり方もこれまでとは違ってくるかもしれません。

日本にいて想像していたこととはまったく異なることもあり、当初困惑することもありましたが、海外日本人学校の子どものための最善の利益とは何か、そのために何ができるのかを常に念頭において、これまで以上に努力していきたいと思えます。

香港日本人学校小学部香港校 浅岡 社夫

香港日本人学校に赴任して、1年が過ぎようとしています。しかし、何をすることも自分にとっては新しいことばかりで、毎日が試行錯誤の連続です。

この1年間を振り返って、最も心に残っていることは、中国への修学旅行です。返還されたとはいえ、やはり香港は国際都市としてのミックスカルチャーの様相が色濃く残っており、「中国」を感じることは少ないので、修学旅行で訪れた広州により強く「中国」を感じました。

以下に広州方面修学旅行の実施概要を載せますので、ご覧ください。

平成12年度 香港日本人学校小学部香港校 修学旅行日程等

1. 実施期日 平成12年11月14日（火）～11月17日（金）（3泊4日）
2. 目的地 中華人民共和国（広州市・肇慶市・佛山市・番禺市）
3. 参加児童 第6学年 137名
4. 引率者 校長、国際交流ディレクター、担任（5名）、専科教員（3名）、養護教諭
5. 活動内容
 - 社会科見学及び現地理解学習
南越王墓 陳氏書院 七星岩 祖廟 切り紙工場 陶磁器工場
広州雑技団 五羊石像 広州博物館
 - 国際交流
広州培正小学校との交流会
 - 理科学習
番禺野生動物園

自分にとってはもちろんですが、子どもたちも初めての訪中という子が多く、香港、そして日本との違いを学ぶいい機会となりました。

これからも、海外にいるからこそ気づくこと、感じることを大切にして教育活動に取り組んでいきたいと考えています。

カラチ日本人学校のこと

松本 洋一

カラチは、日本ではあまりなじみのない名前かもしれませんが、人口1000万を越える、パキスタン最大の都市です。日本人学校では3番目に歴史があるという話を聞きましたし、かつては生徒数が50人を越えた時期もあったようですが、現在はこの国の抱える諸問題（核実験：CTBT未調印、カシミール紛争、クーデター→軍政）のため、小学部16、中学部2、合計18名の小規模校です。わたしは4年生の担任で、教科担任制のため4年の国語と社会、中1、2の国語を担当していますが、どのクラスも1名ずつのため、1日中1対1の授業をしています。

どの日本人学校も変わらないと思いますが、校内研究の柱は国際交流になっていて、本年度は、「豊かな国際性を育てる総合的な学習～人や社会に進んで働きかけ、共に生きる子供～」です。具体的には以下の3つになります。

- ①カラチフリータイム学習：カラチ（パキスタン）について各自テーマを決めて自由研究を行い、1月に行われる発表会で発表する。
- ②クロス学習：各学年部（下、上、中）ごとにテーマを決め、年間を通して、各教科の時間を生かして横断的に学習を進める。例えば4年生（上学年部）は
1学期…カラチをもっと知ろう、2学期…パキスタンをもっと知ろう
3学期…パキスタンと日本のそれぞれのよさを知ろう。
- ③行事、交流の実践活動：現地校やインターナショナル校との交流行事などを児童生徒主体の計画、運営で行う。

このような研究テーマが設定されている最大の理由は、パキスタンに住んでいながら特に意識しないかぎりパキスタンについて何も学ばずすんでしまう環境にあります。

カラチでは治安等の理由により、子供達は武装ガードマンの同乗したスクールバスで登下校をします。また、家や自分たちが住んでいる比較的安全な居住区から気軽に出ることはなかなかできません。さらに、子供達にはパキスタンやパキスタン人に対する差別意識が根強くあります（くさい、きたない、約束を守らない、貧乏、お金を取る、など）。それらの多くは両親など、大人から与えられるものですが、それらネガティブなところを否定するのではなく、（そうならざるを得ない環境などを）理解しようとするために、様々な活動を行っています。

例えば、①では、去る1月13日に自由研究発表会が行われましたが、そのテーマは小学校で「ナン（南アジアの薄いパン）のつくりかた」「パキスタンのくだもの」「らくだのひみつ」などから「モヘンジョダロについて」「パキスタンの学校」など。中学生は二人の共同研究でしたが、ダッカの日本人学校と連絡を取り合い、「昔は同じパキスタン、バングラデシュ」という題でバングラデシュ（旧東パキスタン）の独立を二国民の立場から探った大人にも興味深いものでした。そのような研究を通して子供達はパキスタンへの理解を深めるとともに、現地の人たちとふれあい、生活の様子を肌で感じている様子でした。もちろんパキスタン初心者の方のわたしにとってもたいへんに興味深く、ときに引率ということも忘れて、子供そっちのけで質問責めにしたりしました。

また、③では現地の国際校や現地の私立校との定期的な交流（水泳交流会、インターナショナルデー、相互訪問など）を行っています。カラチ日本人学校では4月から10月まで水泳の授業を行っているうえ（学校にプールはないので、ホテルのプールを週1回2時間借りている）、当地の人はあまり水泳に熱心でないので水泳交流会は独壇場です。インターナショナルデーはアメリカンスクールが中心となっていく国際交流行事ですが、カラチ在住の各国の人が自国文化を紹介するブースを出したり、歌や踊りを踊ったりするなど、毎年楽しんでいるようです。ただ、以上の話は外国人学校または現地の裕福な層が通う一部の私立校の話であって、就学率（出席率）が低く、予算や人員の限られた公立校との交流は難しい状況です。

先日、当校の新年会の際「なぞかけ」で「2001年とかけてカラチととく」というのをやりました。その心は「来るまでは大騒ぎだったが、来てみたらなんでもない。」です。赴任するまではさまざまな心配が頭をよぎり、大変な思いで来てみましたが、いざ海外で暮らしてみるとなんでもないもので（もちろんそれなりの苦労はありますが）、かえって一年たった今でも毎日何かしらの発見をしています。赴任に当たり、たくさんの方からあたたかい言葉をかけていただき、有形無形さまざまにお世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

小学部第6学年の実践

パナマ日本人学校 石川 聡

(1) 活動計画

① 子どもの実態から

本学級の子どもは、みな明るく、活動的である。また、少人数ということもあって、自分の意見を自由に発表することができる。6年生になってからは、1年生のお世話や1年生を迎える会の企画、準備、運営などを通して、小学部の最高学年という自覚を持ち始めている。このようにパナマ日本人学校の特徴である小規模校、少人数学級、在外教育施設という条件が子ども一人一人のよさを引き出す結果となっている。

その反面、どんなことにも敏感に反応を示す時期である子どもにとって、このパナマ日本人学校の特徴が良い影響ばかりを与えるとは限らない。

ア 価値観の限定

小規模校、少人数学級は、人との関わりが限定されてしまう。関わりの限定は、価値観の限定であり、子どもが話し合い、考え合い、より高い価値へと向かおうとすると、到達する価値の高さは限定されてしまう可能性がある。

イ 消極的な人間関係

この時期の子どもにとって友達との存在は大きな意味を持つ。学習、遊び、相談事のどれを通して友達との関わりが重要である。それは、共にいるときの安心感と離れたときの恐怖感の入り交じった関係としても考えらる。本学級の子どもにおいても同様のことが考えられる。そのため、自分らしさを強調することが友達との関係を悪くするのではないかと心配し、互いに遠慮をした関係に陥りがちである。これも人との関わりの体験が少ないため、他の人々の良さを認め、受け入れる内面的成長の機会が不足していることが原因と考えられる。

ウ 体験や情報の不足

海外での生活には、治安面や言葉の面で制約がある。これらは直接子どもに日常生活に関わってくる。例えば、子どもだけで外出することはなく、公共の交通機関を使うこともない。また、自分だけで買い物をすることもない。このようにすべてにおいて日常の体験が不足しているのは事実である。また、子どもにとっての生活における情報は自ら探し得るものではなく、周囲の大人を通して得ている。当然、自分たちがナマの情報に触れ、自分たちで判断することが難しくなっている。

以上の点を考えていくことで、一人一人が自分を見つめ、他者を認めた上で「自ら考え、行動できる」子どもへと成長して欲しいと思う。

② 方法

子どもの実態と育てたい子ども像から、本学級の子どもにより多くの価値観に触れたいと考えた。そのために、パナマに生きる人々（家族～パナマの人々まで）の生き方、想い、夢、願いとその背景に広がる文化や習慣に目を注ぐ機会を数多く作りたいたいと思う。そして、人々とかかわる体験とそこから得るナマの情報を自分の中で消化する能力を養い、人の数だけ存在する価値観や個性を実感して欲しいと思う。また、他者との違いを知ること、自分を見つめ直し新たな発見と同時に他者との違いを受け入れられる内面的な成長を期待したい。そうすることで、自分のよさや友達のよさを互いに認め合いながら、共に懸命に考え、行動していける強い絆と力が養っていきえる。

③ 総合的な学習の取り組み

本校は在外教育施設という特殊な環境にある。そのため、様々な制約があるが、その反面、国内より価値観の違いを強く感じることができる環境でもある。そこで、本学級は、「人」をテーマとして、多くの人々と様々な方法で接していきたいと思う。そして、人々の中の違いのよさを実感していきたい。また、同じ人に接しながらも子どもの感じたことの違いを明確にし、それに焦点をあて、話し合っていきたい。それによって、一つの共通体験を様々な角度から考えることへとつなげていきたい。さらに、数多くの体験活動を通して、子どもが互いの違いとよさを再認識し、自分を見つめ直す場としていきたい。



具体的には次のようなことに取り組んでいきたいと思う。

ア 積極的な交流学習

- ・バルデス校との交流を中心に考え、自分の相手との定期的な手紙のやりとりを行うことで、相手の人柄を知り、関わりを深める。
- ・近隣交流で招待者と楽しめる活動を工夫する。

イ パナマに働く日本人に聞く

- ・大使館の館員の方の仕事、想いについて聞く。
- ・JICAの方の仕事、想いについて聞く。

ウ パナマに働く外国の方に聞く。

エ パナマの人々に聞く。

- ・インタビュー

オ 家族に聞く。

カ 学校の人に聞く。

キ 友達に聞く。

ク 時代を超えて考える。

- ・このような方法を通して、国境や時代を越えても変わらない人間のよさを共に探り、子どもが生きる力を培うことを期待している。

(2) 実践例

① パナマで働く日本人

パナマには、子どもを含め約450名の日本人が生活している。その中で、パナマの発展のために活躍しているJICAの人々を中心に学習した。

ア パナマ森林保全技術開発センターで働く高野さん

毎年6月にパナマ市から約120km離れたリオアトで小学部4、5、6年生を対象に移動教室を行っている。今年度は、植樹、伐採、田植え等の体験学習を中心に取り組んできた。その際、パナマのために働く高野さんに仕事への想いについて子どもが様々な質問をしてきた。

イ パナマ大学農学部牧学科トクメン試験場で働く橋本さん8月にトクメン試験場を訪問し、牛の乳搾り、鶏卵の採集、農作物の収穫、堆肥作りの説明など、普段体験できないことに取り組んできた。また、その際、中南米の様々な国で活躍している橋本さんの仕事への想いについて質問をしてきた。

子どもは同じ日本人がパナマ人とともに遠く日本を離れて日々奮闘している姿を目の当たりにして、「日本人が世界の人のためにいろいろなことをやっているのに感心しました。」「パナマが良くなっていくようにというお気持ちでお仕事をなさっているのですばらしいと思いま



した。」といった感想をもつことができた。パナマで働く人々との出会いを通して心と体で貴重な体験ができた。

② 現地校との交流

本校は現地校（バルデス校，エピスコパル校）との交流を訪問，招待というかたちで年に計4回行っている。この交流ではバディというペアを組んで1対1の交流からクラス単位，そして学校単位の交流ができるように設定されている。



6年生では，訪問の際は送られてきた写真をもとに自分のバディについて話し合った。「わたしのバディは，おとなしそう。」「あわてん坊な感じがする。」「きっと明るくて，面倒見のよいお姉さんタイプ」などと想像をふくらませていくことによってバディに対する関心を高めていった。また，招待の際はクラスでテーマを決めて取り組んだ。本年度最後の招待では，『日本を知らせよう』というテーマに沿って自分の得意分野から日本を紹介した。こうした取り組みから，ただ交流するという考えから，私たちのクラスに招いて，互いに理解し合い，ともに楽しむ姿勢が見られた。さらに，自分たちの懸命な取り組みが相手に受け入れられた喜びが，交流のよさと意義を子どもに再確認させる結果となった。

(3) 考察

① 成果と課題

ア 価値観の広がり

パナマで働く日本の人々との出会いから，地球的規模で考え，現地を理解し現地の人と協力し前向きに取り組んでいく姿を間近に見ることができた。これらの出会いで，子どもの価値観が多様化されたとはいえないが，少なくとも価値観の広がりのもととなる広い視野や柔軟な考え方の必要性は十分に感じてくれたと思う。今後も自分の価値観に影響を与えてくれる出会いをしてほしい。

イ 進んで人に関わる

現地校との交流を通して子どもは明らかに変わった。年度当初は交流活動に対して，「面倒だ」「何となくいやだ」という消極的な態度が強く表れていたがすべての交流活動を終えた今，子どもからは自分たちの卒業制作を交流校にも贈りたいとの意見が出され，現在取り組んでいる。ここまで子どもの気持ちが変わった理由は，交流で互いに相手のことを考えて企画や準備に取り組み，その結果，相手に受け入れられたと喜びや達成感が味わえたからである。この姿勢を持続させていくことが必要である。

ウ 校外学習の充実

子どもの体験や情報の不足を補うために校外学習の充実を図った。その結果情報量が増えたことは言うまでもないが，子どもが五感を通して体験できたことは大きな成果である。また，それらの情報は子どもに強烈な印象を与えるものであったため，校外学習の後には各自が自分なりの感想をもつに至った。今後は，子どもがより問題意識をもって校外学習に取り組めるよう工夫していく必要がある。

② 資料

- | | |
|---------|--|
| 6 / 7 | エピスコパル校訪問感想「あまり楽しくありませんでした。私のバディはおとなしい子でした。」 |
| 10 / 4 | 私はエピスコパル校が来る時に日本の季節を紹介しようと思います。ただ季節だけではつまらないので季節の行事も紹介することにしました。しかし難しい。ただでさえ分からない西語をどうしよう。 |
| 10 / 11 | 今回は日本の四季を紹介しました。日本の文化について少しでも知ってほしかったからです。 |
| 11 / 5 | 私が考えた卒業制作！！その内容は，日本の代表的な花「桜」をちぎり絵でやる。それもバルデス校やエピスコパル校に贈りたい。 |
- 児童の日記より

今日はエピスコパル校との交流でした。私はこの交流で2つのことを学びました。1つ目は，よく雑誌などに海外の人と交流するチャンス！などとよく書いてあり，はじめはばからしいと思っていましたが，今日の交流で

今まで交流があまり好きではなかったのに、そんな雑誌で応募しなくても私たちは2つの学校と交流をしているのです。すごいことだと思いました。つまり、初めて交流の大切さを知りました。2つ目は、海外の人は明るくなくて笑顔の絶えない人達なのだろうと思いました。理由は日本ではとバスに乗ったとき、バスガイドさんが「この歌を知っている人は是非歌ってください」「質問がある方はいらっしゃいますか」ということを聞いても一人として誰も何も参加しなかったからです。それでお父さんは以前から、そういう考えだったので、可愛そうに思い一緒に歌ってあげました。今そのことが分かりました。日本の人はそうで、海外の人はやかましいと思うくらい明るく、笑顔で質問したり、音楽にのったりと人と楽しむ人達なので、そこが良いところだと思いました。今回の交流は今まで一番楽しかったです。

交流学習感想より

補習授業校とは？

サンディエゴ補習授業校 教頭 田村 雅人

みなさんお元気ですか？

補習授業校とはどんな学校か、また派遣教員の仕事について簡単に紹介したいと思います。

ほとんどの補習授業校は現地校が休みの土曜日か日曜日の週1回、いわゆる主要科目（国語、算数・数学、理科、社会）を学習しています。つまり、児童生徒は月曜日から金曜日までは現地校に、土曜日か日曜日は補習授業校に、と2つの学校に通っているわけです。多くの補習授業校の目的は、「将来日本に帰ったときに、すみやかに日本の教育環境に順応できるようにすること」です。しかし、年間授業日数は約40日から50日しかありません。限られた時間の中で、日本と同じ内容を学習する児童生徒の負担はかなり大きいと同時に、指導する先生方の指導力も重要な要素です。先生はこちらにお住まいの方をお願いしており（いわゆる現地採用教員と言います）、必ずしも教員免許をお持ちではありません。さらに、先生方は平日仕事をお持ちの方が多く、大変忙しい中で授業をしています。私たちは先生方の授業について助言、指導するために派遣されているのです。具体的には、全員の先生に研究授業をしていただき、校長先生と私で1時間参観してA4版に3枚程度に改善内容を書き、指導したり、私の示範授業を見てもらったり、教育技術等の参考文献の紹介をしたりしています。今までに4回の示範授業をしました。今年度はあと3回の示範授業を予定しています。

もう一つの派遣教員の仕事は、学校運営に関わる企画、運営です。本年度の年間授業日数は44日ですから、ほとんどの授業日に学校行事等があります。現地採用の教頭先生や事務のスタッフの協力や支援を得ながら、学校運営にあたっています。ですから、週1回の授業だけですが、授業日は大変忙しく、時間が過ぎるのが非常に早く感じられます。その他の出勤日はほとんど毎日残業です。様々な困難はありますが、毎日が充実しています。これからも様々なことを乗り越えて、努力していきたいと思います。

「シカゴ日本人学校での3年間」

宮田 聡

シカゴ日本人学校の児童・生徒と過ごした3年間は、長いようで短いものでした。ただ、教師としての経験、そして何より私自身の経験としてたいへん貴重なものとなりました。まず、お世話になった皆様にお礼を申し上げたいと思います。

シカゴでの思いでは、なんと言っても「子供たちの大きく元気な声、仲良く弾む声。授業での利発な声や休み時間に見せる友だちを集う声。」です。子供たちは、異文化環境のもとで日本の教育を受けるギャップをまるで感じさせないほど元気でした。そして、この学校で子ども達とともに体験した運動会、文化祭、校外学習そしてアメリカならではの現地校との交流学习や社会科見学が、シカゴでの生活・アメリカの風景と重なりより思い出深いものとなりました。

子供たちは、全国から集まり（当たり前かもしれませんが、私自身知らず知らずに茨城弁を使ってしまい最初は共通語？にややとまどいました。関西から来た先生はもっと大変だったかもしれませんが・・・）さらに、日本を代表する企業に勤める保護者を持ち、学校・学習に対する期待の大きさに驚きました。子供たちは単学級のせいでしょうか。非常に友人関係に気を配り、「いじめ」はおろか「他人を中傷する言動」も少なく、素直で学習

意欲があり、授業中は挙手の声でうるさいほどでした。授業は自分の疑問を積極的に発言するので、時として計画通りに行かなかったり、今まで自分で教えていて気づかなかったことを指摘され、私自身改めて勉強しなくてはならないことがたびたびありました。一人一人の子供たちが豊かな個性を持ち、それを誇りとしているので画一的な指導は通用しないと実感もしました。日本人学校の特徴でしょう。途中何人も編入退学者があります。年度始めなど4分の1程の子供たちが入れ替わります。「いじめ」はなくてもその対応が大変です。日本から来た子供は英語が不自由です。異文化環境にも慣れていません。生育歴も様々です。それらを踏まえた学級経営は大変勉強になりました。マイナス面にとらわれず、友だちが変わることで互いに良い意味で競争心を生み相乗効果が生まれると、プラス思考の考えが非常に大切でした。

子供たちや保護者ばかりではありません。同僚の教師も全国から集まるのです。出席簿一つとっても全国で違うのです。(例えば茨城では「填補」という言葉を使っていましたが、他のどこの県もそのような言葉は使わず「補習授業、補習者」というのです。) 学校長と職員会議の関係も考えさせられました。授業の持ち時間数も考えさせられました。研修の考え方も取り組み方も学びました。変な言い方かもしれませんが、アメリカ現地校の実情もあわせて考えると、もっと教育現場・教師の姿勢は変わって良いのではと思いました。

さて話は変わりますが、私は日本で小学生、中学生両方を担任してきました。小中併置のこの日本人学校に赴任して、当たり前のことですが、小学生と中学生は一本の線につながっており、別々に考えてはいけないということを再確認しました。中学生としての成長は小学生のうちにできる芽が大いに関わっているということを感じたのです。「小学生の時期は、まだ小さいからと言いかせたり、子供同士の問題をまだ子供だからと大人の目に対応しては、今は取るに足らない問題でもそれがやがて大きくなってしまいます。また逆に小さな芽でもそれを認め励まし続けていけば、後に大きく育っていく可能性がある。」そんなことを思ったのです。もちろん、一人一人個性もあれば環境も違います。一概には言えませんが、たとえ小学生といえども一人の人間としてその人格を認め、個々の芽を伸ばそうとする支援がいかに大切か改めて考えさせられました。

最後になりましたが、この3年間私を支えて下さった皆様、お世話になりました。ありがとうございました。今後は少しかじらせていただいた「国際人」としての資質向上を目指し、恩返しとはいかなくとも今後の自己研鑽に務めていきたいと思えます。

いっしょにあそぼう！

バハレーン日本人学校 会沢 裕之

1 「Birthday when?」

日本から来て半年後の小学1年生が、外国人スタッフにたずねた言葉である。

この子の同級生は、バハレーンの幼稚園に通っていたので言葉には不自由していなかった。友だちが先生とどんどんコミュニケーションをする中で、この女の子だけは先生の話が分からずポツとしていることも多かった。

そんな彼女が、はじめて自分から外国人スタッフに話しかけたのである。

2 スタッフとの交流計画



バハレーン日本人学校では、バハレーンだけでなくインド、パキスタン、フィリピン出身のスタッフが働いている。2年前まで本校の子どもたちは、バハレーン人のスクールバス運転手とあいさつをかわす程度の関わりしかもたなかった。

そこで考えたのが、校内のスタッフと日常的に交流することである。授業のはじまる前の「朝活動の時間」に週1、2回、そして月1回は、学級活動の時間を利用して、小学部1～3年生まで3学年合同でスタッフと交流することにした。

子どもたちが夢中になれるようなゲームを行えば、外国人スタッフにも抵抗がなくなるのではないかと考えた。また、ゲームのルールを説明する必要も出てくるので、自然な形で会話ができるのではないかと考えた。

3 ぶつかった壁

「何色が好きって、どう言うの？」

ゲームに勝ったチームに、メダルをつくることになった。そのときに、メダルの色をスタッフの好きな色にしたかったらしく、彼女は私に聞いてきた。

「なんて言ったらいいのかわかんないよ。」

スタッフといっしょに遊ぶことに抵抗がなくなってきたものの今度は話したいのにどう表現してよいか分からない、という壁にぶつかったのだ。

4 小学1年生にも会話表現？！

「Please may I photo？」

生活科で学校のまわりを探検したときに、今年2年生になったあの女の子が、写真を撮っていいかを床屋さんさんに聞いていた。

「Please may I have ～？」

という1年生のときに英会話の授業で習った表現を彼女なりに応用したのだ。

小学1年生に英会話の学習というと、ちょっとしり込みしてしまいがちである。しかし、外国人スタッフとの交流をさらに深めていくためには、ゲームをして楽しい時間を共に過ごすだけでは不十分で、必要な会話表現をどんどん教えていく必要がある。

5 いっしょに遊んだのは、はじめてだよ。

「16年間働いてきたけど、子どもたちといっしょに遊んだのは、初めてだよ」

「子どもたちといっしょに遊んだとき、ぼくは24年前に戻った気がしたよ。子どもたちに遊んだ遊びを、大人になった今、子どもたちといっしょにできてうれしかったよ。」

子どもたちといっしょに遊ぶのを、毎回楽しみにしてくれていたスタッフがそう語った。子どもたちもスタッフとの遊びの時間を楽しみにしていたが、スタッフも同じように、いやそれ以上に楽しみにしてしてくれた。

今日もスタッフの笑顔が、子どもたちを迎えてくれる。



「ニューヨーク補習授業校」とは

ニューヨーク補習授業校 大久保 能男

ニューヨーク補習授業校は、ニューヨーク日本人教育審議会 (Japanese Educational Institute of New York=JEI) が運営する教育施設の1つです。これから、ニューヨーク補習授業校の概要を紹介します。

補習授業校は、日本クラブに1962年に「日本語教室」（初等部30名、中等部6名）として始まり、1992年からは、ロングアイランド補習授業校とウェストチェスター補習授業校、ニュージャージー補習授業校の3校に分割されていましたが、1999年度より、ニュージャージー補習授業校は独立し、一方でロングアイランド補習授業校とウェストチェスター補習授業校が統合しました。その統合校が「ニューヨーク補習授業校」と名称が改められました。

ロングアイランド校には、2000年度に開設されたニューヨーク補習授業校唯一の年中組があります。年中・年長組の幼児部から初等部、中等部、高等部までの約330名の子どもたちが学習しています。ホワイトプレーンズにあるW校では約250名の幼児・児童が通ってきています。このW校の校舎は、中世ヨーロッパのお城を思わせるホワイトプレーンズミドルスクールの校舎を借りています。ポートチェスターミドルスクールにT・A校があります。T・A校には、幼児部から初等部、中等部、高等部まで約380名の子どもたちが学習しています。

私たち派遣教員は、火曜日から金曜日までは、ニューロッシェルにある事務所で仕事をしています。土曜日に行われる補習授業校の授業に向けて現地採用の先生方と連絡を取り合いながら準備を進めたり、授業の研究をするために先生方との研修会等を計画したりしています。1年間で45日の授業ですが、国語と算数（数学）を中心に日本語力をつけるために授業が行われています。その中には、運動会や朗読会、作文コンクール、書初め大会などの行事も組み入れ、子どもたちが意欲的に学習に取り組めるよう工夫もされています。私たちは、ニューヨーク補習授業校で学ぶ子どもたちが主体的に学ぶことによって、人として大きく成長することを願って活動をしています。

あ と が き

ここに、先生方に2度目の定期的な広報誌をお届けいたします。諸般の事情により広報誌をお届けすることが遅れたこと、深くお詫び申し上げます。

今回の広報誌には、会長の細野先生を始め、海外の先生方や帰国された先生方からもたくさん原稿をいただきました。お忙しい中、原稿をいただきまして、どうもありがとうございました。この場を借りましてお礼を申し上げます。

在外教育施設へ赴任されている先生方への原稿依頼には、Eメールを使いました。ほとんどの在外教育施設でメールボックスが開設されており、とても助かりました。また、原稿を送付していただくのにもEメールを使いました。私のメールボックスの容量が小さいので、迷惑をかけたこともあったのではないかと思います。お詫び申し上げます。写真も添付ファイルで送っていただきましたので、広報誌に掲載いたします。広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるように、今後整備していきたいと思っております。興味のある方は、ご覧下さい。

ホームページアドレス—<http://members.tripod.co.jp/kenkawa59>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと思っておりますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス(ken-kawa59@clubAA.com) (文責 河嶋)